

「ごんは おねんぼうがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。」

語彙的・文法的意味・構造

指導の要領・留意点

「お念仏が——すむまで」

井戸のそばに

ごんは ———— しゃがんでいました。

- ・しゃがむ＝(動)ひざを折り曲げて腰を落とす。かがむ。「道端に・む」
- ・しゃがんでいました…動きの持続 *?
- ・～まで＝限定を表す助詞。お念仏の時間の期限を表す。

・ごんがとても不安定な姿勢でいたことがわかる。しゃがんでいるごんは、兵十がいつ出てくるか、気が気ではなかっただろうし、少し警戒もしていただろう。兵十がお念仏をすませて出てきたら、さっさとついていけるようにと考えていたにちがいない。お念仏は、少なくとも二時間程度はかかっただろうが、ごんはしゃがんでいる時間に何を思ったのだろう。兵十のおつかあの心を思い、兵十のつらかった気持ちを考え、自分のいたずらを深く反省し、おつかあの靈に手を合わせたのだ。

・あれほど動き回りたいごんが、じっとしゃがんで、しんぼう強く待ったのは、おそらく二人の話の続きが気になってしかたなかったからだろう。

兵十と加助は、またいっしょにかえっていきます。
げぼうしをふみふみいきました。

ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十のか

- ・かげぼうし＝光が当たってできる人などの影
- ・ふみふみ＝(副動詞)一つも踏み外さないように。「ふみながら」も副動詞であるが、ふみふみの方が踏む動きが生きており、確実さも感じられる。

* 言語学的には、意味のちがいはないとのこと。「ふみふみ」の方が文語調であるという違いだけだという。しかし、この場合、「踏みながら」とはニュアンスが違う。

- ・は、主語のない文。(ごんは)
- ・また＝

(副) (1)同じ事柄が再び起きたり、繰り返されたりするさまを表す。(ア)もう一度。再び。重ねて。「川の水があふれた」(イ)今度も。同様に。やはり。「今日も 雨だ」(2)他と比べて事態・状態が同じであるさまを表す。やはり。同様に。「彼も 人の子である」(3)もう一つ別の要素が加わるさまを表す。その上に。「彼は 熱血漢でもある」(4)上にくる副詞を強めて(驚きいぶかしむ気持ちを表す。それに付けても)。「どうして そんなことをしたのだ」

(接続)

(1)その上に。かつ。「金もいらない。 地位もいらない」
あるいは。または。「今日でもいい。 明日でもいい」(3)話題を変えるときに用いる語。それから。とこうで。

- ・帰っていきます…遠のき態
- ・ついていきました…遠のき態

・お念仏をすませた兵十と加助が、吉兵衛のうちから出てきた。兵十が出てくるのをじっと待っていたごんの目の前を、二人は、来たときと同じようにいっしょに帰っていく。

・ごんが思ったことは何か、()でくくらせる。

・二人の話の中に、きつとおれが出てくるはずだ、どんなふうに出てくるだろう、話の続きをどうしても聞きたいごんは、加助と兵十の後ろからついていった。

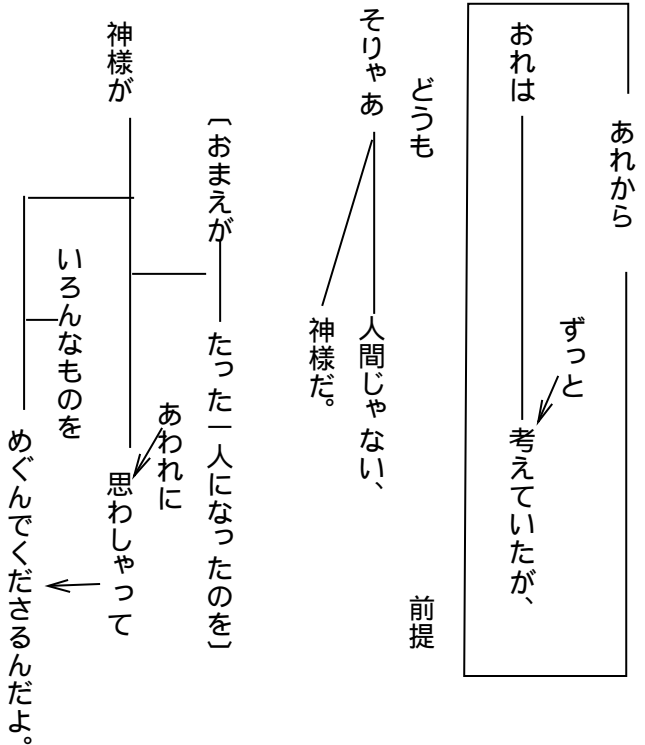
・虫の声が聞こえ、大きな丸い月が出ている秋の晩の情景を、再確認させたい。兵十と加助は、月の方へ向かって歩いていく。ごんの目には、二人の背中が真っ黒にうつっている。少し長めの黒いはつきりとしたかげができているのもわかる。ごんは、兵十のかげぼうしの中に入っているのだ。月明かりの中を帰っていく兵十の長くのびたかげを、ひとつも踏み外さないように気をつけながら、ごんはついていっているのだ。ごんは、ほんとに兵十のすぐ後ろを歩いていることがわかる。かげでもいいから、兵十といっしょにいたいと思う兵十に寄せるごんの気持ちを読みとれる。

お城の前まで来たとき、加助が言いました。
 「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」
 「えっ？」
 と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

- ・きつと = (陳述副) (1) 確実にそうなるだろうと予測しているさま。「明日は 晴れる」「君なら 合格するよ」 (2) 自身の事柄に関しては決意を、相手に対しては強い要望を表す。必ず。「一日には お返し致します」
- ・確信の強いおしはかり
- ・そりゃあ = 共通語では「それ」。さっきの話をさす。強めてい
- ・る。
- ・しわざ = したこと、やったこと。所業。所為。「これは、だれのーだ」
- ・さっきの話…四の場面の会話

- ・は、時を表し、場面がさしだされている。何か、今までと違うことが起きるのでは…と、読み手に予想させるとよい。
- ・二人は中山さまのお城の前まではだまって歩いてた。二人の話の聞こえ方としていくごんなのだが、なかなか話さない。お城の前まで来たとき、ようやく、加助がごんの聞きたくてたまらない話を言い出したので、「ごんは、聞き耳をたてたのだ。」
- ・さっきの話は、と切り出していることから、加助は、ずつと考え続けていたことがわかる。は、加助の断定である。兵十のいった不思議な話は、人間のしたことではなく、神様のやったことだと言いつつ切っている。
- ・は、兵十のしたことが書かれている。
- ・「えっ」と声をあげた
 加助の顔を見た
 ↓
 考えてもないことを言われて、兵十は意表をつかれ、その真意を知りたかった。
- ・聞いていたごんも、兵十と同じように思ったにちがいない。

「おれは、あれからずつと考えていたが、どうも、そりゃあ、人間じゃない、神さまだ、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやっつて、いろんなものをめぐんでくださるんだよ」
 「そうかなあ」
 「そうだと。だから、毎日、神さまにお礼を言っがいいよ」
 「さっ」



- ・は、加助のことばである。あれからは、四章の の文から後をさす。そりゃあも、四章の の文をさす。
- ・おれは、ずつと考え続けていたのだが、兵十よ、おまえにくりやまつたけを持つてくるのは、人間じゃない。神様だ。神様が おまえがただひとりきりになったのをかわいそうに思われて、くりやまつたけをわけてくれるんだよ。と、加助は強い口調で言っている。
- ・加助は、 で神様ということばを口に出し、兵十を驚かせ、でさらに神様のやったことだと強く言い、兵十を納得しようとしている。
- ・加助のことばを聞いて、兵十は半信半疑、動も合点がいかない気持ちで、 のようにつぶやいた。
- ・で、加助は、さらに自信のある言い方で、きっぱりと兵十のつぶやきをつけている。毎日、迷わずに神様にお礼を言えはいんだと押しつけている。
- ・加助の強い決めつけに対して、兵十は、生半可な返事をしていく。そう簡単には信じられない兵十の気持ちである。

「ごんは、

「へえ、こいつはつまらないな

と思います。

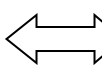
「おれが、くりやまつたけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいっつんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」

くりやまつたけを

おれが

持って行ってやるのに、

A



そのおれには お礼を

(兵十は)

言わないで

B

神様に

お礼を

言っつんじゃあ、

C



おれは

ひきあわないなあ。

D

・ A、B、C全体は、状況語的なつきそい文。(理由・原因を表す)

Dは、主文。さらに考えてみると。

A、Bは、ならへあわせ文

A、Cは、ならへあわせ文

B、Cは、ならへあわせ文(対句的な表現)

・ 持って行ってやる=やりもらい動詞

・ ひきあつ= (動) (1)互いにひっはりあつ。「綱を」

(2)引き受けて損得がつりあつ。割りにあつ。また、もうけがあ

る。「面倒だが十分」

・ う仕事」「とても」

・ わない話だ」

(3)努力する価値がある。「苦労して叱られたのでは」

(4)取引する。約束する。「先刻内々」

・ うておいたあの美しい可愛らしい弁才天女滑稽本・膝栗毛」

(5)手をとりあつ。協力する。「平一揆は葛山と」

・ ひて太平記 37」

・ 兵十の後ろを見つからないようにしていくごんは、ひとことも聞きもろすまいと、二人の話を一生懸命に聞いている。そんなごんにとっても、加助のことは、思いがけなかった。ごんは、つまらないなと思い、さらに、ひきあわないなとおもったのである。

・ ごんの心の中のつぶやき、思いである。ごんは、くりやまつたけを持って行ってやっているのは、神様ではなく、このおれだと強調している。それなのに、何も持っていない神様にお礼を言ったりするんじゃあ、おれはひきあわない、おもしろくないなあと思ったのだ。

・ おれはひきあわないなあというごんつぶやきから、ごんが完全にそう思ってしまったのではないことも読みとれる。

・ くりやまつたけを毎日持つていくのは、ごんであることを兵十にわかってもらいたいし、知ってもらいたい。さらに、ごんが、ひとりぼっちの兵十に近づきたい気持ちをおさえきれずにいることも…。ごんは兵十を、友だち、仲間、親しみの対象としてみているのだ。だからこそ、ひきあわないなと思いつつも、やっぱり、次の日もくりを持って、兵十のうちへ出かけずにはいられなかったのである。

・ 会話の部分は、表現読みをさせて、兵十や加助やごんの気持ちををはっきりつかませたい。